

外科学教室 呼吸器外科学部門

当科が呼吸器外科部門として名乗りを上げたのは、1999（H 11）年の外科ディビジョン化の一環として移植・呼吸器・内分泌外科の体制になったときであった。しかし、その歴史を紐解くと第二外科 3 代目教授の河村謙二教授（S 4 就任）の時代まで遡る。当時は国立三重療養所を初めとする多くの結核療養所を関連病院として持ち、特に肺結核の外科的治療に貢献していたと言われている。さらには、第二外科 4 代目教授の橋本勇教授（S 42 就任）の時代には、①移植・内分泌外科、②胸部外科（心臓血管・呼吸器）、③消化器外科という様に胸部外科の一部門として存在し、第二外科 5 代目教授の岡隆宏教授（S 58 就任）の時代には、現在の呼吸器外科の基礎が作られていった。

1999（H 11）年に吉村了勇教授（H 11 就任）率いる移植・呼吸器・内分泌外科部門の中で、戸田省吾学内講師を科長としてスタートを切ったわけであったが、同年に加藤大志朗助手が加わる。2000（H 12）年には北村信夫教授（H 12 就任）率いる心臓血管外科の一部門に再編され、心臓血管・呼吸器外科部門として新たなスタートを切った。2002（H 14）年には、与謝の海病院から島田順一助手が帰任し、若手の呼吸器外科志望者も徐々に増え出し順調に発展が始まった。2003（H 15）年には戸田学内講師が大津市民病院の呼吸器外科部長として就任し、大学は大阪府済生会吹田病院の心臓血管・呼吸器外科部長の西山勝彦が講師として帰任、島田助手は学内講師に昇任する。さらに井伊庸弘医員は大学院を卒業と同時に公立南丹病院の外科副医長として就任（2005 年には呼吸器外科医長に昇任）した。2004（H 16）年には、加藤助手が社会保険京都病院の外科医員として就任した。2005（H 17）年には西山講師が大阪府済生会吹田病院の心臓血管・呼吸器外科部長に就任したため、島田学内講師が正講師に昇任し、新たな呼吸器外科科長として西村元弘助手とともに大学の呼吸器外科を担うこととなった。2006（H 18）年になって、社会保険京都病院の加藤が公立南丹病院の呼吸器外科部長として昇任、井伊は京都府北部の呼吸器外科開拓という使命を持って、綾部市民病院の呼吸器外科主任医長として昇任した。社会保険京都病院には西村助手が外科医員として就任（2007 年には呼吸器外科医長に昇任）し、西村助手の後は、伊藤和弘助教が引き継いだ。

現在当科は、夜久均教授（H 16 就任）率いる心臓血管・呼吸器外科部門に属し、島田講師を科長とし伊藤助教も含めた 6 人で臨床・教育・研究を三本柱とし日々邁進し続けている。臨床面では、原発性肺癌を中心とした肺腫瘍に対し胸腔鏡を用いた低侵襲な方法での手術治療を行っている。他にも、胸壁腫瘍、縦隔腫瘍と取り扱う疾患は多岐にわたっている。2005（H 17）年からは、島田講師の提唱する「3つのメス（手術・化学療法・情報革新）」構想のうちの一つである抗癌剤治療も、術後の adjuvant chemotherapy から再発肺癌まで積極的に行うようになる。2007（H 18）年には、京都府立医科大学付属病院が京都府のがん診療連携拠点病院として指定されたことにより、当科も京都府の肺癌診療に大きく貢献することとなった。教育に関しては、医大生の講義・ポリクリ等の教育はもちろんのこと、2・3ヶ月ごとにローテーションしてくる専攻医の先生

方に対しても 4 人の呼吸器外科専門医をもって、専門的な考え方や治療戦略等の指導に取り組んでいる。研究面では、学会発表は国内・国外を問わず年間 30~40 演題発表し、2008 (H 19) 年度は International Association For The Study Of Lung Cancer (IASLC) を初めとする国際学会で 12 演題発表するにまで至った。更には、島田講師の発案した磁場誘導方式による胸腔鏡手術用ナビゲーションシステムや LED 関連の医工学への取り組み、分子生物学的な面からの肺癌の病態生理・メカニズムの解明及び治療の研究などその内容は多種多様で、多くの科学研究費補助金の助成を受けている。また、2004 (H 16) 年より島田講師が発起人となり「京都肺癌をなおす会」という研究会を開催し、今年 (H 19) も 9 月 15 日に第 4 回が京都府立医科大学図書館ホールで開催され、国立がんセンター中央病院病院長の土屋了介先生を迎え、「癌対策基本法の基での病診連携」の演題で特別講演をしていただき、盛会のうちに閉会した。

今後も現状に満足することなく、常により高い志を持ち、より高い目標に挑戦し、より高い成果を導けるよう研鑽と努力を継続していきたい。

柳田正志



(2008 年 9 月 15 日 第 4 回 京都肺癌をなおす会 土屋了介先生とともに)